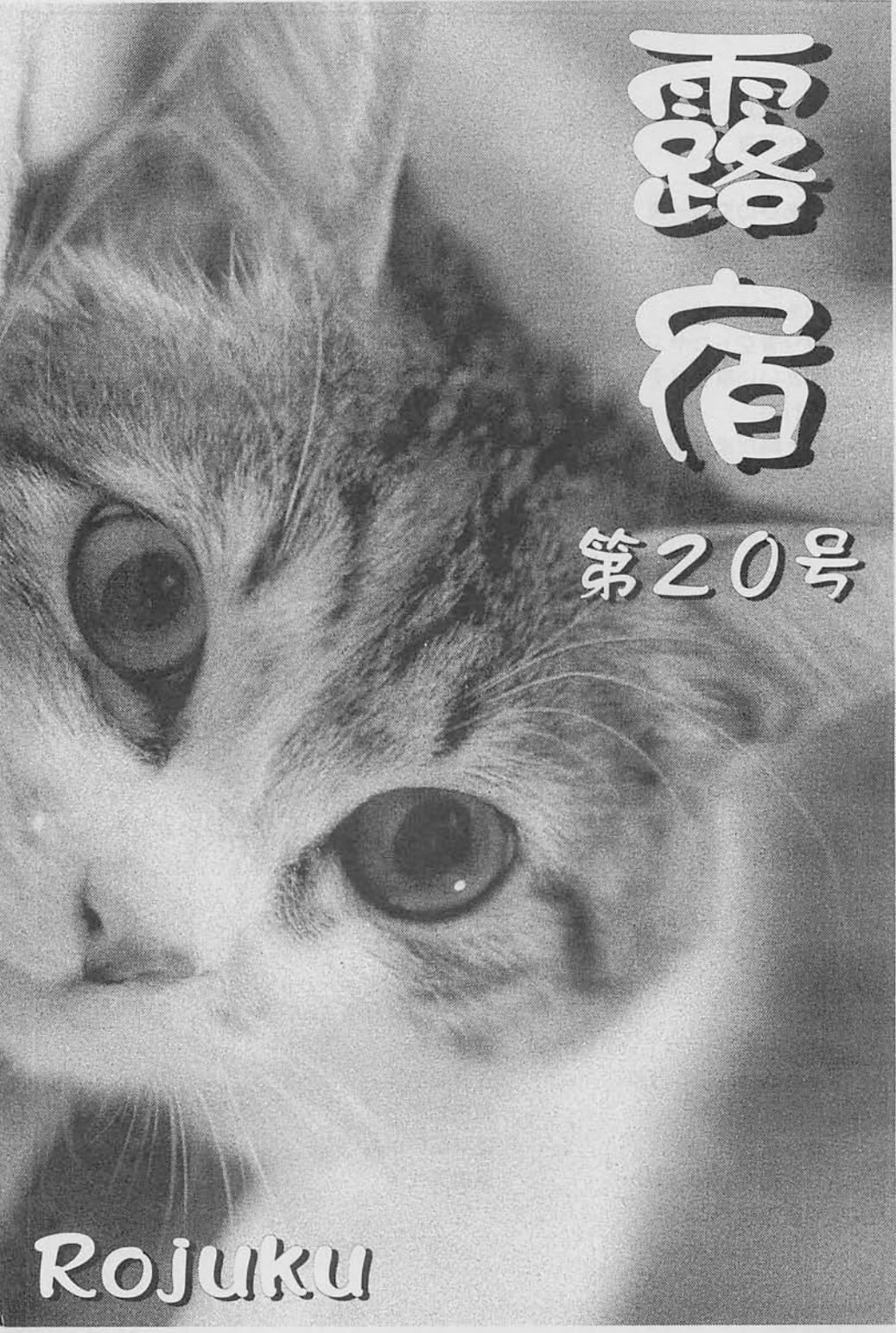


路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

2002年9月1日発行



露宿

第20号

Rojuku

定価500円

## 露宿

		目次
表紙写真	工藤真紀子	
文中写真	岡田知子	
無題	五林修	2
山あひの交流一夜	富士森和行	3
酔生無死 野宿三千生	禿黄耳	5
夏の一滴、一滴	田代猛	11
おもいで 他	清翠	13
唯今青空トコヤふる回転	宗春	
何かいい事有りそうな	弓削鴻介	14
五行詩	近松雅之	
詩・陽だまり 他	秋戸空	15
恋の道玄坂	三島勇次	16
	内山田潤一郎	
	百合咲かおる	
男の波止場	百合咲かおる	
結婚詐欺師	望月大成(挿し絵も)	19
ホームレス自立支援法		
について一言	新宿連絡会の友人	22
朝太郎の箱船	鈴木克彦(挿し絵も)	23
無題	橋安純	27
手紙	平之家暁星	
手紙	田代猛	
無題	名無しの権兵衛さん	
私の決意	岡本光司	28
無題	名無しの権兵衛さん	
もしかして、パートⅠ～暮診～	只野醉払	29
挿し絵	CAMEL	
無題	名無しの権兵衛さん	32
水道町より	高橋美香	33
東京路上ふらり散歩	笠井和明	34
	岡田知子	
赤い花	はり師いが丸	37
おきなわ旅日記～釣り～	恩田美代子	38
編集後記		

# 五林題

修



青い空の下に、一層の黒い空があつて、またその下にアスラ達が群れる層がある。

東京では、桜の花が咲き誇る時だけ、空が青くなるだけで、アスラ達の苦渋に満ちた顔もその時だけは幾分晴れやかに見える。

花が散り、雨が降る頃になれば、地下に住むアスラは、元の青白い生氣のない顔で、元の場所へと帰ってゆかなければならない。

阿修羅の春こそは、年に一度だけ狂喜することを許された希望なのだ。

陽が照っているはずなのに、光も影も感じられない世界で、ただ一心に解放されることだけを望んで止まない。地上の人がアスラを閉じ込めたまま、一人で狂い切っている。だから、相応の報いを企てたとして何の責めがアスラに増し加えられると言うのだろう。

人の嘆みこそが、アスラなのだ。

アスラは、自らを知っている。

そうなりたくてなった訳ではない。アスラは不条理を生きねばならぬ点で、どこかあのシーシエボスに似ている。受け容れ難い運命に抵抗して生きたテスにも似ている。

不条理を受け容れて死ぬ者も多い。が、アスラもシーシエボスもテスも“死ぬことによって生きる。事を選んだ。”  
“違いない。”  
“違いない。”

桜は、散ると知って咲き誇るのでない。

咲くことも散ることも、同じ定めなのだ。いやそれすらもない。純心に咲き、一心に散るのだ。

とかく人は意味付字を試みる。試みに、海辺へゆき波の音に耳を澄ませば、アスラが海辺を徘徊し光を絶たれたことの不當を訴える声が波の音と化して聞こえるだろう。

この試みは、自然と呼んでいるものと同化している点で誤りではない。私達は、阿修羅なのだと解る。そこから空しい命が、死をも越えようと懸命になることを知るのだ。

これは、生の死の命の……あらゆる全てに意味が与えられる極めて稀な試みだ。世界は、征服されるために、我々に時を与えた。

—山あひの交流一夜—

廿拾二首

富士森和行

あつれきに耐えかね孤り行く距離の長きにやさし夜の労ふ  
ねぎら

里山の襞より晴る、雨ぎりの遙るかに聴きし鶯の声  
ひだ

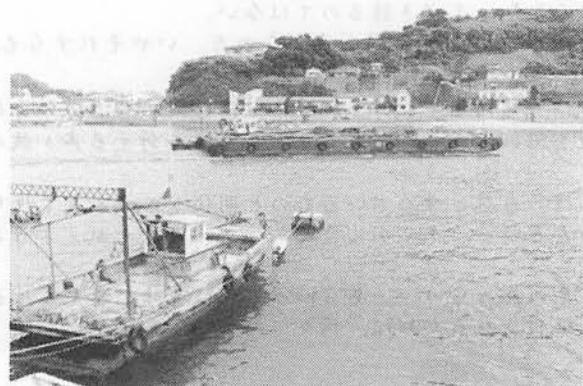
山間の一夜せ、らぎに明けゆかむ底辺の交流の歓び久し

川辺りに沿ひて田植えの済みし田にそよぐ早苗よ梅雨の晴れ間を

鮎釣りの人らも思へて水澄める山あひの川にわが身濯がむ  
す

拙くも過去を綴りしものなるに路上の友ら吾が心購ふ

「新宿ホームレスの歌」会場にて完販



無分別に見へつ、思慮の眼差を対けるモヒカン刈りの若もの、居て  
舫ふごと援け合ひつ、生きもとす日本のボヘミアンよ心して待て  
十字架のペンドント戴きし女と会ふ変らぬ愛の斗志あふる、  
路上の支援に献ぐ貌ならむ女の強き美くしきかな  
もや  
ひと

うす紅き合歓しとゞなる露の下せゝらぎの音別るゝ瞬時

援け合ひ生きる心の辛うじて残る路上の交流哀し

車窓より帰途の海みゆ曇天の午後倦みてゆく老いの眼となり

いくつかの隘道抜ける情景に思ひを託す神への祈り

鄙びたるこの赤海の駅にいつか降りる日あらむかと束の間おもふ

海紅豆の朱き一樹の駅の隅に隠れて独り罪の如のむ酒

無下にもならぬ蟠りためつゝも梅雨の晴れ間の日照りの強し

山の湯に聴えて来るかさゝやかな老ひの旅なる癒しのありぬ

川に沿ふバスの路線の曲りなり再びは得ぬ旅情にひたる

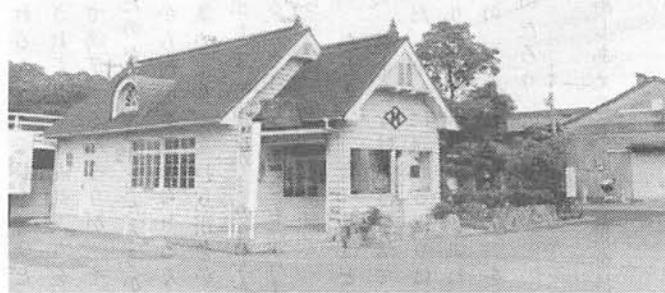
底辺の声いま一つ届かざる国に生きつゝ愚痴は言ふまい

山間に雨ぐも湧きつ流れ行くわれの心を蔽ふ如くに

新宿の夜更の灯をば背にしつゝ底辺の声あづけし想ふ

静岡県島田都市交流センター

6・23 「山の家」第19回寄せ場交流会にて



# 醉生無死 野宿三千生 禿黄耳

空飛ぶ飛行機は鳥族が翔る原理を構造化することで、つまり構造を真似ることで空を飛ぶ。ところが混乱の渦中にいるおれには相似るべき構造を言葉の内に見出せない。これは、混乱しているということと言葉とが互いに共有すべき構造を持たないためだ。いまここに1台のピアノがあるとしよう。混乱しているおれはピアノによっておれの混乱ぶりを伝えようとする。リズムもメロディーも滅茶苦茶なこの音の羅列を聞かされる人々はこれを音楽と呼ぶだろうか。その音の羅列の中に表現された見事な混乱ぶりを聞き取るだろうか。さらに、おれはそれで満足するだろうか。その音の羅列によつて混乱は全て表現されたのだと期待するだろうか。おれは混乱も言葉も好きじゃない。だから何かを訊ねられるくらいなら黙々と公園に降る落ち葉を拾い集めたり、麦わら帽をかむつて動物園のサル山で草むしりに精を出している方がまだましだ。もちろん首には手拭いを巻きつけている。そうして誰とも語らず、何も聞かれず、夕方に一杯のやんから。

おれは何かを訊ねられることが嫌いだ。たとえば、食べ物はどうしているんですか、とか、仕事はとか、お金がなければ生活できないでしょとか。好きじゃない。嫌いだ。それに訊ねるほうは訊ねるだけ訊ねると答えのほうにはあまり興味を示さない。訊ねるほうはまだ答えが終らないうちから次の「お訊ねしたい言」を訊ねだす。それはたぶんこういうことなのだろう。

一、ここに野宿者がいる

二、わたしとこの野宿者とはたぶん理解しあえる共通の言葉を持

三、理解しあえる共通の言葉を持ちあわせていて以上理由はない

が何かを訊ねなければならない

四、だが、その答えに興味はない

と、そんなところだ。要するに暇なのだ。

あとは深入りしたくない。早くこの場を立ち去ろう。  
 あるいは、訊ねるほうには現実や事実とは無関係に最初から自分の答えが揃つていて答えを誘導するというタイプだ。つまり、おまわりと同じタイプだ。そして誘導がうまくいかなかつた時「お前はウソツキだ」となる。訊ねる人は訊ねるだけ訊ねると何も置いていかない。ごはんもお金も置いていかない。置いていく人は何も聞かずに置いていく。そうして顔も見せない。見せるものといえば、稀に後ろ姿くらいのものだ。  
 何かに答えることは楽じやない。問い合わせたものがまた問い合わせになる。  
 答えがあるなら答えもするが、答えないなぞなぞめいて三千年も生きようとする人生は疲れる。

思うに、「問い合わせ」というものには「間違つた問い合わせ」と「正しい問い合わせ」の二つがあるような気がする。

小学校一年生の時だ。

「いちたすいちはいくつかな? 紗予子先生がおれに質問した。すでに「天童」とうわさされていたおれは当然答えを知つていて。

しかし、おれは答えられなかつた。おれは紗予子先生が大好きだ。

紗予子先生はすごい美人で村人は誰もが紗予子先生のことをイングリット・バーグマンだといつてた。あるいは「利発なテレマコス」とも呼ばれていた。おれは残念なことに「石橋をたたいて渡る少年」でもあつたのだ。きれいな先生。だから、もしこの答えが違つていたら紗予子先生に嫌われる。紗予子先生に嫌われて一生を生きなければならぬ人生を想像した一瞬の恐怖がおれを無口にした。おれが答えられないでいると紗予子先生は恵子に優しく質問した。

「いちたすいちはいくつになりますか? すると恵子はなんのためらいもなく、になります。と、あっさり答えてしまつた。

恵子はほめられ、おれは無視された。つまり、「正しい問い合わせ」にのみ「正しい答え」が与えられるというわけだ。  
 ところが、中学一年生の時である。懲懲無礼な田古先生が生徒諸君を前にブチ上げた。

「君達の天分は何か?」

村長さんは田古先生のことを「あいつはハゲだ」といつていた。おれは田古先生のハゲを一度も見たことはなかつたが、なぜか来る日も行く日も同じ髪形でいつもピカピカに輝いていた。それに誰の髪よりも黒味が深く、「あいつが近寄るといつも頭から変な臭いがするんだ」とアツちゃんがいつていた。

教室ではみんなが勝手なことをいいあつていて。おれは何も考えられずに広いグラウンドを渡る風が砂を舞い上げる渦を眺めていたり、黛ジユンの歌を頭の中で口ずさみながら教室の窓の彼方へ、空を流れる雲に見とれていた—雲に乗りたい。

ベルが鳴つて目が覚めると、おれのほっぺたはまだらに赤色変移し、机はベットリよだれで濡れていた。つまり、「間違つた問い合わせ」をハゲはおれに投げつけたのだ。

そんな風にしておれの毎日はいまだに眠つてゐるか目覚めているのかのどちらかだ。眠つてゐる時は目覚めていない時だが、目覚めている時は眠つていいない時。だから、何かをやつてゐる時は何かをやつてゐる時で何もやつていいない時は何もやつていいない時、となる。

こうしてみると「正しい答え」というのは實に殺風景でつまらない。どこか間抜けだ。恵子の答えもいまとなつては霧雨にけむる墓地に、一人ただずむ未亡人のようでどこかもの悲しい。そんなもの悲しさのためだつたのだろうか、大人になつたある日の夕暮れ、四条畷の駅前をうろついてゐる時にとうとうあの胸元に捕まつてしまつた。あの日、女はおれを見つけるとすぐに近寄つて来

て問い合わせた。

「あなたはなぜ生きているのですか？」

いま覚えているのはその一言だけだ。おれより二つか三つは年上の姉さん。いまでは顔も忘れたし体つきも覚えてはいないが、あの妖しい胸元だけはいま思い出してやつぱり興奮する。匂いがついたレモンイエローのうすいブラウスに半分つまれて半分はむき出しのジョンブリアン。欲しい。おれはもう誘われるがままに従つた。胸・胸・オッパイ。ツンとんがつたオッパイが頭の中を駆け巡り、あの手この手の思案をめぐらし、どんな修羅場になろうともいたくものはキツチリいただこう。胸・胸・オッパイ。おれ達は買い物でにぎわう商店街を歩いた。恋人達のように、にこやかに人生を語り合いながら。踏切を渡つてしばらく歩くと怪しげな路地裏に入る。細い道を歩き、歩いては曲り、曲つては突き当たる。また曲る。ようやくオッパイが立ち止まつた。もうすづかり暗くなつたジョンブリアン・ディープの先きには怪しく古ぼけた大きな木製のドアが立つていて。ディープはノブに手を掛けドアを開けた。

「どうぞ、入ってください。

あー、誘つてる。いよいよだ。胸・胸・ディープ。おれは入る。

長い椅子には見覚えのない顔がいっぱい坐つていて。ハレルヤ？

何かが始まる。

「アーメン!! アーメン!! ハレルヤ!!

アーメン？ 何かが始まつて、何かが終ると、

「寄付金をお願いしまーす。

寄付金？ また何かが始まつて。四角い小さな箱がまわされて、誰もが箱の中へお金を入れていて。おれもつられてお金を入れる。そのうち何人が立つてあがり、出口のはうへ歩きだす。歩きだす。

どんどん人が歩きだす。しだいに人影もまばらになりだした。どうしたんだろう。レモンイエローが見当らない。ディープ。もしかしたら彼女はおれをちょっとのあいだ困らせようとして意地悪をしているのだろうか。あるいはあのオルガンの陰に隠れている。いや、彼女はいまこの古ぼけた建物のどこかに隠れていておれが早く見つけだすのを待つていて。小鳥のような胸が期待と羞じらいと喜びに満たされて、彼女はこの建物の中のどこかに潜んでいる。そうしておれの動きをじつと見つめているに違いない。「お願ひ、わたしをどこかへ連れてつて」おれは捜す。どこにいるんだろう。どこかにいるはずだ。「どこ？ どこなの？」「ここよ」ニッコリ。

最後は婆さんがしめくくつた。

「今日は終りましたよ。みなさん帰えりました。あら、初めての方？ 来週また来てくださいね。さようなら。さようなら。おれは手をふられた。おれにはわからない。おれはやりたかったのだがやられたのだろうか。

「あなたはなぜ生きているのですか？」なんて、そんなことがあるつてからも何度も誰かに訊ねられたことがあるような気がする。どうもよくわからない。たぶんそんな問い合わせもある。そんな問い合わせに対する答えも言葉としては間違つていいのだろう。しかし意味はあるのだろうか。仮りに意味があるとしてもどうでもいいことだ。幸運なら今日の答えが絶望の淵を巡る明日の答えと違つていたとしても何の障りもない。問い合わせ一つだからといって答えが一つでなければならない理由はない。逆に、一つの答えから幾つもの問い合わせを演繹することだってできるのだ。「加減乗除の四則演算を駆使して答えが6になるような式が全宇宙にどれだけ存在するか？」と問うことはできる。言葉として通用するからだ。しかし、誰がそんな式を全て書き出すだろう。もし神が全ての式を石板に刻み

つけたとしても悪魔は決して引用しない。

## 路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

おれの毎日はなんとなく酔っているか酔っていないかのどちらかだ。あんまり思い出したくないが、昨日は酔っていた。そしておれはいつの間にか眠っていた。おれが目覚めると真夏の太陽が濃い茂みの奥底にまで行き渡り、公園のそこここにはすでに二本足がむせかえっていた。おれはテントにいなかつた。おれは銀杏の根元で目が覚めた。なんだか天から降り注ぐ乳白色の光りにつまれているような気もしたが「お先き真暗」という気にもなった。それから真暗な乳白色。この年になると明日はもうないかも知れないな、などとふさぎ込んだり、明日がなくともあさつてがあるだろうなどとするい考えに救われたりする。おれが目覚めた場所は銀杏の根元だが、別にそこへ倒れ込んだというのではないと思いう。何も覚えていない。ただ最近のおれは酔うとむやみに倒れてしまうらしいのだ。「何か重い病気なのか脳のどこかが壊れていのかも知れない」と他人にいわれた。そんなはずはない。おれがおれ自身を診る限り、おれは壊れてもいなければ病んでもいい。ただ、もし誰かがおれを知ろうとするならば、彼は「おれを」ではなくおれの友人達を観察するだろう。その時だけだ。おれが壊れていたり病んでいるように見えるのは、確かにおれの友人達は万事が万事壊れているし病んでいる。だからといっておれまでが壊れているわけじゃない。その証拠に、つい先日もおれは酔っぱらっていたが記憶ははつきりしている。まるで今日の事のように覚えている。

その日も酔っぱらっていたおれは某文化会館の横まで来ると無性に倒れくなつた。無性に暇だったからだ。だから倒れた。この日は朝から記録的に激しい太陽が空一面、無数に燃えさかり、おれの体を焼きつくしていた。焼きつくされたおれは倒れる前から

# 路上が 国を動かす!!

2002年夏、路上の仲間が求め続けて来たホームレス自立支援法(議員立法)がついに成立。国の責任が明確に。法を手にした路上のたたかいは路上脱却10年戦争に突入!



## 新宿連絡会

☎ 03-3876-7073/090-3818-3450 FAX 03-3876-7073  
ホームページ <http://www.tokyohomeless.com>  
メール [shinjuku@tokyohomeless.com](mailto:shinjuku@tokyohomeless.com)

<カンパ金送り先>

郵便振替口座: 00170-1-723682 「新宿連絡会」

すでに全身が汗でドロドロに濡れている。ここはもう砂漠そのものだ。

脳髄も路面も乾きも空気も砂漠そのものだ。その砂漠の熱風に耐えながら身動き一つせずに俺は倒れ続けた。俺は耐えた。意味もなく、価値もなくただ耐えた。あるいは意味に抵抗するよう、価値に逆らうようにひたすら耐え続けた。砂漠の中では必要なものなどそう多くはない。安全と水だ。それに食糧。もう酒をしこたまいただいているから水分と食糧は十分だ。それにここは、白い斜線で囲われた安全地帯であつてみれば何の不安もない。車だつてここは通らない。全ては揃つてある。あとは待つだけだ。何を待つ？ なんだつていい。とにかく、まずは倒れる。「何か」はあとからついて来る、だ。そして俺はこの苦痛に耐えては待つた。ただひたすら次の「何か」が起るまで。そうしてしばらくするとやつぱり何かがやつて来た。

おまわりだ。  
通行人A：（ババア。汚い右手を上げ、おまわりに手招きしながら小走りに交番へ駆け寄る。汚い左手にはきれいな「とら屋」の紙袋をぶらさげている）  
「おまわりさん、おまわりさん、あそこ。ほら、あそこ  
に男の人が倒れているんです」

（振り返って、くたばりかけた某文化会館の方を指差す）  
おまわり：（ババアに向つて二三歩あゆみ寄るがそれ以上は近寄らない）

「なんですか」

（手は後ろ手に組んでいる。頓馬な目、臭い口、クソのつまつた鼻の脇には腐った耳がぶらさがつていて、サルの方がまだましだ）

ババア：「あそこ。ほら、あの建物の横ですよ。男の人が倒れているんですよ。早く行つてあげてください。（また瓦礫の山を振り返り、クソ溜めを指差す）

デコスケ：（ひっくり返つた声で）

「文化会館の横ですね。わかりました。行ってみましょ」

（黄ばんだメモ帳を取りにタンツボの中へ入る）  
とかなんとか。バカなヤツ等だ。

（黄ばんだメモ帳を取りにタンツボの中へ入る）  
ようやくアホヅラの御到着。

ヤツはおれの前まで来るとおれの左脇に立ち、右手に持つていたメモ帳を左手に持ちかえて背筋をピンと伸すとひと呼吸おいておれの方へとかがみ込む。右手でおれの肩をペチャペチャと軽く二回叩く。

一旦那さまん。どうしたんですか。

ときたもんだ。

どうもこうもねえ。おれはその時すでに死んでいた。当然アホヅラの呼び掛けに応えられるわけがねえ。そしておれはもうずっとこのまま死に続けようとした心に決めていた。ところが、どうしたわけかおれにもわけがわからねえ。おれはおれの心の中のどこからかは知らねえが、何かがニタニタとこみ上げて來るのがわかつた。そうして満面にニタニタが行き渡るのを感じた。もうどうにも手の打ちようがねえ。肩まで震えだして來やがつた。

そこでヤツはうつぶせに倒れているおれの肩を掴んであおむけにしようとした、とその時だ。まさにその時、よだれと汗でふやけきつた埃っぽいおれの横顔に表われたニタニタがアホヅラの右の

目と左の中へ同時に飛び込んだ。

ヤツは言つた。

「またお前か!! 起きろ!!

通行人も振り向くヤツのその声で、おれは根の國から黄泉帰った。

ヤツはそれ以上何も言わずしばらくおれを眺めていたが、おれが

おれだと確認すると動物園のある薄暗い木立ちのトンネルの中へ

消えて行つた。おれのニタニタも消えていた。おれは虚ろな眼差

しでガニ股に揺れるアホヅラの両肩を眺めた。乱視のうえに泥酔

の加わつたおれのまなこには幾つもの焦点を失つたヤツの左の肩

と右の肩がこうごに交じり合いながら揺れていた。

そう、おれがこの辺りで死んだのは一度や二度じゃない。誰もか

まつてくれない寂しい一日は、人通りの多いこの某文化会館の辺

りへ出掛けでは死んでいた。そのための着替えも持つている。だ

からヤツはおれを知つていたし、おれもヤツを知つてゐる。知ら

ないのは通行人だけなのだ。

ヤツは決して悪辣なおまわりじゃない。個人としてみれば、ヤツ

もまた一人の老いた無名の労働者でしかないのだ。いつか同じよ

うに泥酔したおれは出勤して来るヤツの胸ぐらを掴んで訳のわか

らない与太を飛ばし続けた事があった。勿論ヤツの性格を知つて

いたからだが、あの時酔っぱらつてふらついているおれなどどう

とでもできたはずだ。しかしそれもせず、むやみに抵抗すること

もなくヤツはおれの与太を聞いていた。しばらくしてもう一人の

おまわりが駆け付けるとおれは交番へ連れていかれた。そこで二

言三言の小言をいうとヤツはおれを放免した。

そんな言をこのとき覚えていためだろう。おれはヤツが立ち去

つたあと、ヤツに対してかおれ自身に対してか、なんとも哀れなものを感じた。

おれは座り込んだまま目を上げた。すると、西洋美術館の正門の

脇でラファエル爺さんのマリアが腕組みをしながらおれを見詰めていた。マリアはおれに向つて妖しくほほえんでいたが、おれを誘つているのだろうか。彼女もまたL.H.O.O.O.なのだろうか。わからぬ。

命を愛し、幸せな日々を過ごしたい人は、

舌を制して、悪を言わず、

唇を開じて、偽りを語らず、

悪から遠ざかり、善を行い、

平和を願つて、これを追い求めよ。

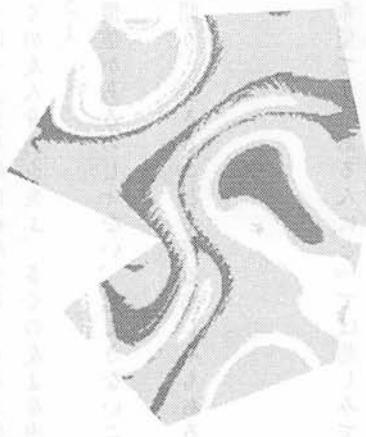
主の目は正しい者に注がれ、

主の耳は彼らの祈りに傾けられる。

主の顔は悪事を働く者に對して向けられる。

(「ペトロの手紙」日本聖書教会発行より)

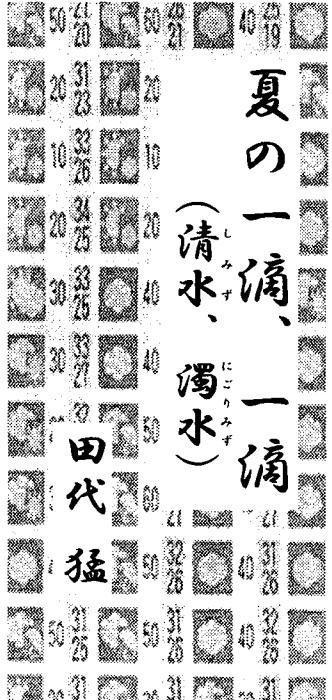
もし主が全知全能なら、主はなぜおれの所へ來るのに遅れたのだろう。



# 夏の一滴、一滴

(清水、濁水)

田代猛



徒動員中、八月九日午前十一時十五分原爆に被爆する。十八才の多感な青春期でした。数多くの友人身内を失ふ。多くの友よ身内よ安かれと祈る心のせつなさよ。

『戦争は知らないことに價値があるのじやない、起こさないことに價値があるのだ』

生きる喜びを説く心に問う。生きることで得る悲しみもあると

駅

日本一の総合商社、三井物産に東京地検特捜部異例の140人態勢で鈴木宗男北方四島不正疑惑でガサ入れ。巨悪、東京拘置所で眠むらせるな。

その時逮捕された人物に社長賞!! 表彰状すかしてみれば逮捕状!! 説明会見に社長逃亡—これが日本一のエリート集団、本物の総合商社も逮捕状、エリートとは字引きでも見てみるかなー

02年上半期(1月—6月)九八七二件(負債額一千万以上)戦

後三番目の高水準。負債総額(七兆四四三九億九一〇〇万円)戦

駅はある人にとっては、希望です。ある人にとっては悲しみです。そしてある人にとっては想出です。駅のホームは人間にとつては、始発駅だろうか、終着駅だろうか、駅にうづまく人間とは——新宿駅でのホームでふと雑念にふける。或る日の夕べの僕でした。毎日少しづつそれがなかなか出来ないんだな——この僕は。

『窓明けし梅雨の空は曇りけり鈴木宗男許諾逮捕の記事読み始む』

立派な言葉はあるが、人の心を揺り動かすものがない。根源的な理念や思想が欠けてゐるもののが集ると結末はどうなるのだろうか——。

抵抗に始まつて、要求の時代は終え、連帯、参加の時代になるならば國民に(市民に、都民に、区民に)理解されなければ力を持たないのではないか。そんな思ひを世の中に鮮明に知らせるナショナルセンターとしての大きな理念をもつと強く出すべきだと、そんな心の思ひにふける老いし僕です。

琥珀色の夏の空照りつける。去る五十幾年前、郷里長崎市で学

梅の花は他の花に先きがけて咲く。そして他の花に先きがけて

散る。僕も梅の木の花見たいに、徹底的に己をつらぬく、そして権力にこびることなく、そしてマア、マア主義でなく己の初心に立ちもどることが大事だ。今現に静かに己の行動を己の初心にふり返ることも前進の一つだと——暑い夏——そして涼しい秋そして寂しい秋が訪れて来ます。皆さん九月に又、文と文とそして心と心のつながりの露宿で会ひませう。

僕も僕なりに頑張って懸命に生きます。皆さんも暑い暑い夏を乗りこえて九月の文と心のつながりを心から希望致します。

自殺者一年間三万人以上、四年續く、経済苦六八四七人、年最高と一緒に新聞、テレビ報道伝える。人間一つしかない尊い生命を自ら手で断つ。特に経済苦で——。これを、政治家や官（行政）は何の責任を感じてゐるのであろうか。立法よ、行政よ、もはや哲学や宗教の域を脱してゐるのが現実だ。怒りと政・官との不信を心に問う。

弱者よ、仲間よ、多くの友人よ、ただ生きるんだ生きるんだ」としか云えない我が心の空虚感を痛切に心におぼゆ——。僕も昨日、自ら介護保険の認定の問題で渋谷区役所介護保険課と戦ひました。介護保険の認定の不自然さを徹底的に突き（医療センターの革進的な医師の助言、革進的な介護保険に詳しい区議の助言）等々で渋谷区長の正しい認定を勝ち取りました。如何に官がデタラメかを白日の下にきらけだしました。それはまる一日（小泉首相であろうとも）も平等です。持てる者、持たない者で、何の差別があるのでせうか——。僕は生命の續く限り反権力、反骨の心で懸命に生きます。それしか道は残されてゐませんので——

一般の人気がリストラで苦しみ経済苦に陥つてゐる厳しい現実の社会なのに。

#### サンデープロジェクト七月二十八日放送—調査

全国法人二万六千 年二〇兆億弱 都一八〇〇法人 年三億強 区二一〇法人 一億弱 天下り八割り 役人のカクレ受更、定年後、退職金受取り後、又退職金最高六回一億六千万

そして汚職一〇・二%（刑事案件立件のみ）これ皆、國民の血税です。恐るべき実態。二〇〇二年七月三〇日現在完全失業率五・四%三六八万六〇〇〇人、三六万人増、依然として高水準。仕事をあきらめてゐる人二〇七万人、これらの人を入れてない。いれると八・三%。恐るべき高水準。収入なし一九〇万人、家族入ると一三〇〇万、國民の一〇・五%。厚生労働省七月三〇日発表。

これで國民に少々の痛みですか、小泉さん（自民党）、神崎さん（公明党）、野田さん（保守党）「恥を知れ」政党の党首として、否一人の人間として一片の良心があるのでせうか——今日も何处かで、経済苦で、自ら生命を自らの手で断つてゐる人がゐるのですよ——路上にのたうちまわてゐる貴方達と同じ人間がゐるのですよ——。

そんな空しい怒りを記しました。どうしても一人の人間の良心として——。記しました。

七月三〇日 三五度の猛暑の日記す

# おもいで



人に優しく、ありたいと

音楽喫茶「おもいで」の店の中

に居ると何か心が和む気持でいっぱいでした。

優しい優しさ、お互に負けだ

と感じ合つたところで、心の中に、敗北感に、煮ても煮えきれない。

「おもいで」に、最後の一口ドアを押すと、鈴の音が、カラソ、コロンと聞えた。木の温もりと、人間のあたたかさを、コーヒーが手元にくる、わずかな時間の中、どこかに懐しさが、空中に漂う心がしてきたのです。

場末で見つけた、音楽喫茶「おもいで」で

ドアを押すと、鈴の音が、カラソ、コロンと聞えた。木の温もりと、人間のあたたかさを、コーヒーが手元にくる、わずかな時間の中、どこかに懐しさが、空中に漂う心がしてきたのです。

## 川柳

青カンの空に輝く天の川

天地人暑き心に夏の空

私のおもいでとは、何なんだたら飲んだ、そして、目をとじた。

私のおもいでとは、何なんだらうか。考えれば考えるほど、わからなくなる。ただわかっているのは、人間どんなに頑張って生きても、苦しいこと死にたくなるよ

うな恥ずかしいことが、一つや二つ必ずある。とのこと。

そんな時、私は絶対に人を嘲け笑うような人間になるまいと、またどんな時にも、最高の笑顔で、

## 清翠

# 唯今青空トコヤ ふる回転 宗春



何かこの所、やけに全身に気が入らないようだ。別に悩むようなことはないが人間として、一時の迷いかも知れない、暑い夏のせいかも知れない。夏の夜、眠りに入るのが恐ろしい気がする。単に年のせいかも知れないし、寮に入つて、何不自由なことは無いが、唯一考えることは寮の中での自由と時間が少なく感じるが不自由なことと思う。

グチはこの位にして本題に入ろう。

唯一自分に与えられた手に職を生かして、不運で困難な仲間のために散髪を四年前から始めました。以前マスコミの人がつけた青空床屋も今年も健在である。

始めた当時は理容用具も一式ありませんが、不徳のいたりで失いましたが、仲間たち始め支援してくれる人達のお陰で何とか助かつて居り、唯今青空トコヤふる回転で忙しいのです。

自分の寮でも行ない外の寮へと行なうようになり、又お金もなく困難に強いられて仲間の元へも出掛け散髪に勤めていきます。

散髪するのみならず多くの病気などで苦しんでいる仲間も少なくないこの状態で、私が何が手だけ出来るだろうかと、常に思いつつ青空トコヤを行なうつもりです。これからも健康でいる限り仲間の元に出掛けける自分です。

完

## 何かいい事

### 有りそうな

(一)

洗い晒しの、浴衣が似合う、  
姉さん被りの、お姉さん、  
今日は朝から櫻掛け、  
鼻歌交じりの下駄の音  
ルルルル、ルルルル、ルルルル  
何かいい事、有りそうな、  
梅雨が明けたよ、ああ、昼下がり。



子削鴻介

(二)

昔恋しや、田舎の暮らし、  
井戸端談義に、花が咲く、  
タイムスリップ、されちゃつた、  
紫陽花彩る、庭先で、  
私ひとりが蚊帳の外、  
入れて頂戴、ああ、蚊帳の中。

(三)

何故にどうして、電話もくれぬ、  
極樂蜻蛉の、上の空、  
愚痴は言つても、惚れています、  
必ず来てよね、針千本、

朝日と夕日が  
一緒に見えた  
不思議な場所に  
きつと行こう

ルルルル、ルルルル、ルルルル  
何かいい事、有りそうな、  
徒な夜風の、ああ、知らぬふり。

監獄

海

おめでとう  
ようこそ監獄へ  
不自由な毎日へ  
ここでの看守は  
冷酷だぜ

月

君は旅立ち  
世界を泳ぐ  
そして私は  
アルコールの  
海に溺れる

裏目

寝

諦めることが  
苦しくて  
海まで走り  
月に向かって  
泣いた

きっと

間違いじゃない  
たまたま裏目に  
出ただけで  
そのやり方を  
曲げることない

寝

寝

## 五行詩

近松 雅之

終止符の先

存在

終わった  
何もかも  
ジ・エンド  
ここで諦めつから  
おめえは凡人

それは存在する  
どんなに迷惑でも  
恐ろしく邪悪でも  
真偽善悪を越え  
ただ単に存在する

出エジプト

不実

イスラエルを目指し  
モーゼ不在で旅立つた  
たつた一つの戒めは  
決して後ろを  
振り返らぬこと

始まりは狂喜  
増殖する憎しみ  
身を焦がす執着  
孤独の井戸に落ち  
決意する別れ

夢じやない  
朝日と夕日が  
一緒に見えた  
不思議な場所に  
きつと行こう

悲しみを解き放つ  
切り刻む手を止め  
思いを馳せてみる  
幻と現実の狭間で  
何かを遂げるため

きっと

寝

寝



俺たちはあんた達と  
同じ人間なんだぞ・と・

いつも心の中で訴えていたるんだよ

〈世間〉の嘘の夢は  
俺たちの路上生活とは  
一様ではなかつた：

（世間）さんよ！  
あんた達には本当に  
訴えるべき者が

俺らは「ヤンカラ」のほうが

まだましだと、そう想うんだ  
：俺らの憤りは深く、深く

見ていないね  
かわいそなうに・な  
視ようともしない・ね

沈み込むように  
黙り込んでしまつたよ

世の中は俺らの  
訴える事にも  
聞く耳を持たず  
聞く耳は持つていなかつた：

俺らは考へ込んでいたんだよ  
「野辺（自然の草原）で寝られたらな  
あ」・と  
自然是もうここにはなかつたさ：

俺らの訴えは（世間）の人達の  
頭上を空しく通り過ぎた  
（世間）の人たちの  
傍らには、嘘があり  
俺たち路上生活者にとって

（世間）からは《ここにビルジング  
建てるからだけ其處をどくんだ！  
この飲んべいの浮浪者め！》と  
いくらでもある仕事も  
だから路上で寝ているだけなのに：  
回さない、家もない

## 尊嚴

陽だまり 22

俺ら路上生活者は

自分たちの

路上生活を持つていて

尊厳とも云える生活を：

（いつも命がけの生活をしている・から  
ね・）

ねころんで見ていると

通り過ぎていく  
（世間）さんよ

俺たちはあんた達の  
足元をじつと

見つめているんだ

俺たちの路上生活はその嘘を  
（世間）の人たちのようには  
楽しめなかつたから

社会の、小、青年たちは  
嘘を巧みに教えこまれて

俺たちの、生きさま、と

俺たちの、生きさま、と

路上生活者の尊厳を  
踏みにじっていた

## 断酒

99 (初夏にて…)

彼は何を始めたのかと云うと  
‘空缶’を拾い集めるという事だつた

普通のスチール飴はダメで  
アルミニューム缶だけは、いいと…

かれは、集める、集める、

ある人（彼）が「おれは、…」  
アルコール依存症と云つていた

10kg でたつた100円だと云うけど

大変な仕事だつた

自分自身をたてなおすために  
一つの仕事を見つけたと云う

私は、嬉しかつた

大変な仕事だつた  
誰が何をやめないと云うとやめない！

彼は、それをやめない！

ほかのセンパイたちにバカに  
されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

ほかのセンパイたちにバカに

されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

ほかのセンパイたちにバカに

されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

ほかのセンパイたちにバカに

されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

ほかのセンパイたちにバカに

されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

ほかのセンパイたちにバカに

されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

ほかのセンパイたちにバカに

されても“酒を断つのには

それがカンジンなんだ！”・と

0師に云われたと云う

いつたい何回0師は云つただろう

彼が何を云おうとやめない！

もう飲まん、そう云つてゐるじやあ

ないかこのバカ、けるな！」

實際彼の顔を見ると

酒化がなかつた

「10日も飲んでないよ

誰かにさそわれたつて

前のオレだつたらとびついて

いたけど、ことわつたもん・ね

と云つた

O 師 〔仏經〕や私やほかの

センパイたちから小銭や

O 師 現物（酒）で飲ん

でいた彼

O 師や私は“パンでも買つて

と云つたのに、いつのまにか

アルコールに化けていたTちゃん

その時も（だめだなオレは…）

と云つたTちゃん。：

M 牧師（女性）は（お酒入つてるのね…）

そのTちゃんが、すつきりと

した表情だつた今

ほかのセンパイたちは

ビールを片手に

ちよこちよこやつて来て

その缶からを足で

つついていたセンパイ、Tちゃん

をからかい半分に：

このセンパイはTちゃんは

それが出来たので

うらやましかつたのかも知れない

（あんな事よくできるなあ、なんて

想つたのかも知れない…）

センパイたちに悪意はなかつたのだ

かつたのだ

そう言う事も彼（Tちゃん）は知つてい

た

背からの仲間であつたろうから：

（だけど皆なこんな事

始めたら日溜まり・が…）

日雇い労働者のプライドとして…

皆なは、クズ屋、のまねは

したくない・と・

私は勝手に想つてしまふ

あ、あ

イエス・キリストよ：

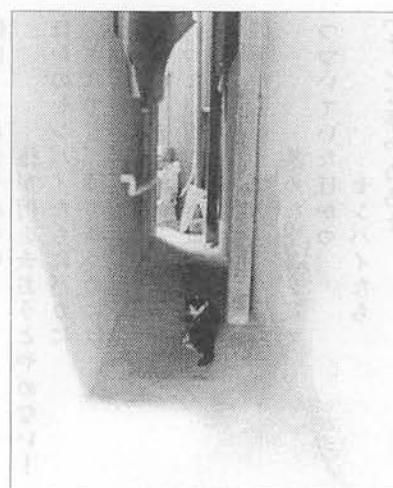
だけど彼にとつては

とても良い事を

始めたTちゃん

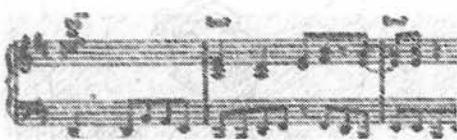
本当にガンバレよ

と私は想つてゐる



# 恋の道玄坂

三島勇次・内山田洞一郎 詞・曲・合作  
百合咲・かおる 補作詞



一、  
 雨のけやき道を一人で歩く  
 道玄坂は二人の物ね  
 とても一人じや歩けない  
 私も早く 恋人さがすわ  
 雨の雨の雨の道玄坂はさびしい物ね  
 雨の雨の雨の道玄坂は一人じや淋しい

二、  
 愛し合う二人の足どり軽く  
 道玄坂は愛の道ね  
 花壇車のバラを君に  
 買つてあげたいきつと似合うよ  
 秋の秋の秋の道玄坂は落葉ちる道  
 秋の秋の秋の道玄坂は二人の恋の想い出

三、  
 道玄坂を左に曲り  
 キヤバクラのあの娘に会いにいこうか  
 めぐみにみかに千春にかづきに  
 みんな氣立のいい娘ばかり  
 夜の夜の夜の蝶が道玄坂にまう  
 夜の夜の夜の道玄坂は夜の花園

# 男の破止場

百合咲・かおる 詞曲

一、  
 (リロ独唱)  
 あなた 知つてる? 男の破止場、  
 女乗せない 男船。  
 一度限りの契さえ  
 片のかもめが許さない、  
 月の浜邊ですすり泣く。  
 あゝあゝ紫、紫の  
 恋は流れ、流れ、何處へ行く。  
 (合唱) 「うーーうーー」

(リロ) 男の破止場

二、  
 (リロ)  
 あなた、分つて、男の破止場、  
 女惚れない 男船。  
 誰にも見せない 故らさない。  
 潮風未練の燈台・岬。  
 あゝあゝ紫、紫の  
 恋は流れ、流れ、何處へ行く。  
 (合唱) 「うーーうーー」

(リロ) 男の破止場

# 結婚詐欺師

望月大成



不運なり 邪宗身延に魅入られて  
さだめの星は 女房  
因われの妻 信すればまだ見込みあり  
邪教退散 百万回で お題目

内山と望月両家の火種消し  
鬼母清子 何云うぞ 真実明すは母ごころ  
語たく並べて 両家の火種  
消したきがため

今思えば邪宗の使い 馬亭主  
とんだお見合 マイコンの罠  
ナントヨー フリーフリー  
ホーレンゲキヨー

ガツカイ節 法輪寺 近づくならず あの寺は  
邪教身延の キチガイの寺  
今ぞ知る キ印亭主 邪宗の出  
私は哀しき だまされの妻  
女房

我が息子 病のもとは亭主なり  
邪教身延の 黒き血筋は  
邪教捨て信心正せば見込あり  
おすがり申せ 御本尊様

逢いたるもたつた一步の行き違い  
寂し別れば 初恋の人  
すべて皆 邪宗のせいぞ 法輪寺  
裏でリモコン あやつりの糸  
ガツカイ節

十五にて先祖返りは五才の子  
精神病棟 吾子は六号  
ガツカイ節 怖るべき邪教の呪い 目のあたり  
生きて地獄は 過去世のわざ  
女房

今ぞ知れ 逢うは別れの始めなり  
一家離散は 運命の糸  
ガツカイ節

路上文芸総合雑誌『露（Rojuku）宿』

家の名も寺の名譽も売つとばし  
己一人が  
聖母マリアで

違うなり 邪宗身延の血なりせば  
ルーツは早稲田  
法輪寺なり

邪教とてなすべ知らず 母ごころ  
愛の証は  
血にも勝りて

大成

女房

見て涙 お可哀そうなお義母様  
キ印息子

女房

信心はこれぞ心隨 正宗は  
邪教糺して  
人を憎まず

女房

猫好きも困り者なり ゼン息の  
重き病の  
子をかえり見ず

女房

猫捨てよ こつそり始末 さもなくば  
猫いらず盛れ  
万事上々

女房

広き家に吾子をのう、マイホーム  
思い存分  
心休めて  
ガッカイ節  
邪教の手

大成

我と似し吾子にあればぞ 人の花  
末楽もしき  
夢もありける

大成

やめるべし 近所迷惑 聞くならば  
イヤホンつけよ  
今は真夜中

女房

父と似し二人なればぞ 心配と  
苦勞の種は  
末の末まで

女房

何故ナルゾ 皆デ聞クベシ 歌ウベシ  
広宣流布ノ  
ウルトラノ歌

子育ての心も知らぬバ力亭主  
愛情なくて  
育つかも

女房

母様が吾子を心配 落第で  
ゆくり、のんびり

女房

母サンハオ仲間ンチデオ題目  
僕ハ樂シイ  
ウルトラノ歌

云えるなり 正解なれば親の罪  
兄貴は本家の  
ペットなりけり

女房

許すまじ 鬼母の黒腹 君知らず  
吾子の屈辱  
ソロバチの上

女房

親子なら似た者同志  
一つ穴  
せがれウルトラ  
女房拌み屋

一過性 ほとばり覚めばもと通り  
案するなかれ  
吾子の病は

女房

女房

キ印の子を持つ母のその苦勞  
知りてあればぞ  
義母はとがめず

女房

大嫌い そうだてぬとは何事ぞ  
無学と見下げ  
人バカにして

口軽でとんだとばかり 大成

鬼母の本音を 小姉貴

ついぞもらして

女房

母様はホントに御苦労 手のかゝる

キ印亭主

我もほと、

大成

うわべでは過ぎたる嫁とおだて上げ

マイコンひと掛け

裏で舌ペロ

息子

キ印ノパパノ行ク先 鉄格子

モーツ先ハ

法輪寺カナ

女房

今はまだパパが必要 君がため

我が家のローン

終る日までは

息子

モシヤパパ 僕ノ悪口 飲ミ屋ニテ

言イフラシテハ

オ楽シミカナ

大成

その通り 酒のおつまみ これ最高

君の悪口

息子

ア・ンダメ 僕ノ悪口 言ウナンデ

アッチャコッチャデ

ファイテ歩イテ

父さんはおからかいなり 気にすまじ  
お前のことなど 眼中になし

女房

悲しみの親の心を知らぬま、

せがれ十八

大成

猫捨は貴様の仕業 鬼母の知恵  
ぜん息息子

帰りくるとて

ウルトラの歌

父方の親の血を引く宿命なり

分裂病は

血統書つき

女房

君がため身代りパパは大センセ

姿見えねど

いつもお傍に

息子

父ハアツテモナクテモイヽ才人

池田センセヲ

父ト思エバ

ガツカイ節

君がため身代りパパは大センセ

姿見えねど

いつもお傍に

息子

父ハアツテモナクテモイヽ才人

池田センセヲ

父ト思エバ

ガツカイ節

君がため身代りパパは大センセ

姿見えねど

いつもお傍に

息子

天罰や 聖母マリアが化けの皮

ペツトがなくて  
鬼母狂いたる

女房

何事ぞ さつぱり分らず 君が言

たわけ話は

聞く耳がなし

女房

マイホーム 持ちて嬉しき我が息子

広きお屋敷

羽をのう、

大成

追ん出しの清子かり、 角出しまも

大成

通力失せて

昇る太陽

我が家安泰

ガツカイ節

マイホーム 持ちて嬉しき我が息子

広きお屋敷

羽をのう、

大成

嬉シカリ 池田センセノオ影ナリ  
心ガ晴レテ  
邪宗退散

# ホームレス自立支援法

## について一言

### 新宿連絡会の友人

大蔵の西成労働センター付近の釜日労の支援者が言ったことで、（92年ごろ）「国としてホームレス対策をやるのは、10年かかる」と言う有名な一言がある。

正に92年にやつとやつと、國、国会としてホームレス自立支援

思えばここまで来るのも大変であった。

昨年か一昨年か民主党案から始まつて、子党三党協議と進むどころが、有事法制三法案、健康保険法改正案、個人情報保護法案へのマスコミ、出版界、労働組合の反対等、大きな法案が相次ぐ中、鈴木宗男氏どうのこうの、外務省うんぬん、財務省ぬんぬん、内閣府うんぬん、小泉政権の構造改革うんぬんの中、後々にされんじやないかと思われたが、本当にやつとである。

また、ホームレスも中学生等に襲撃されるとか撤去とか、いろいろな大変を思いがあつた中、苦しい中、不幸にして亡くなつた

者たちもいた。全国各都市の福祉事務所等の対応はどうか、また日本だけでなく、世界各国はどうかとか、福祉政策はどうかとか、これからは、それを踏まえて、心してやりたいと思う。

ホームレスであっても、自立ができ、立ち直れることが出来るようにしたいし、行政側、区役所側、福祉事務所側だけでなく社会全般もリストラ失業対策に心を出し、仕事を求める者は多いけど、採用というのはなかなか大変の中、「世捨て人」や「はじかれ者」ではなく、また益みや強盗や犯罪行為にならずとも、どもに支援の中で自立生活ができるようにしてやる。

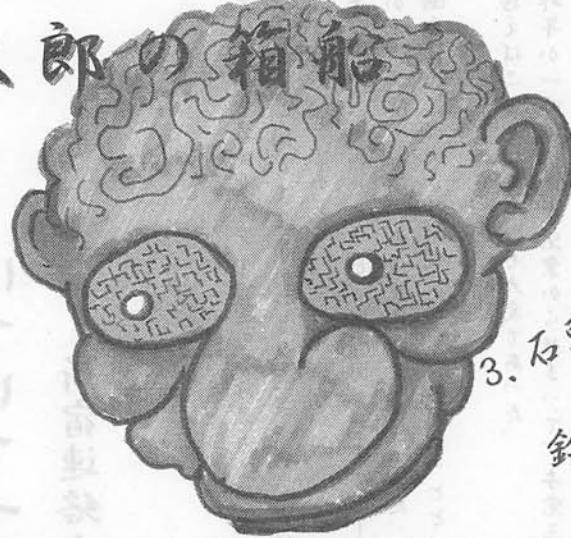
私はこれから風俗関係の仕事をやりたいが、これもなかなかあるが、とにかく法律ができるても、借金とか、家庭の事情とか、仕事場での人間関係とか本当に大変であるが、私たちに身近な都道府県、市町村が法の運用主体であるため、國はそれを大きな方針でバックアップするのであるから、なんとか、これから私も自立が出来るようになる氣持である。

新宿連絡会だけでなく、全国の野宿者支援組織、日雇組合、ボランティアとまたキリスト教の教会の協力があつて燃出しがある中で、私はこれからもキリスト教精神で心から出来るようにしたい。

保護、保障するだけでなく、各個人個人の能力やそれに応じ自立への道をできるよう、また年齢や年が暮くとも会社側に断られる人が多々ある中、「住所不定、無職」と言われる人から「住所固定、無職」とし、だんだんと「有職」へできるように、國、各県、市町村、行政からのサポートと共に、会社関係も福祉ボランティアも進んでくれるよう期待する者である。

（JR川崎駅、川崎区役所付近にて書く）

# 朝太郎の箱船



3. 石頭寺本頑児の巻

鈴木克彦作  
(山下金七)

## 二 石頭寺本頑児官僚一揆の章

神の三雨作戦は殺雨と略雨に消雨  
それでも大雨大風大嵐に高波ナラバ必死で耐えて戦うが

四十日もの嵐と船揺れが少しくオサマ

ツタる中間的な嵐は 極度のキンチヨウや忍耐力がタルミおのおの方の病気が妖しく奇妙に進行してゆき

朝太郎さまが船底に下りてきて少しく楽しくなった気持も霧散してマツ青になつて大便と小便を堪えて足

ブミしていたのが奔出して ガマンが切れでカンシャク餅がハレツするこんな有象無象のランチキ騒ぎを神々が笑つてタノシンデ見下しているんだからシャクではないか

コレデモカ これでもかと船べり叩く海波にユレテ揺られて恐怖観念緊張症に被害に加害 誇大妄想まで力キタテル 気になる力サブタまで力キタテテ剥いでいつも血が止まらない

そんなやつらが暴れ放題 走り放題 憤慨面のヒステリー しかも集団で狂ってしまう

そんな憤りは当然に必然に 人に向つ

て走り出す おお朝太郎これを何んとかできないか

だが当の朝太郎 過労と不眠痴狂人へ

の気疲れのためノビている

この時に乗じて正しい生活規範と秩序の回復 思想の統一を望む大小のグループ それもかつて婆婆で上部だつた者 今じや下部の者に成り下がつた者の力が台頭する

そんな力が上がつてると船底情況は何んとなく 朝太郎登上の時とは逆に 彼のやり方に不満の声もたかまつてくる

ここでイッキに今の体勢をつき崩しおかしな者を弾圧し まともな者が船を支配するようなフンイキになりつつある

かつての身分 本分を船客に徹底的に分からせよう 復活させようとケイサツ漢を筆頭に元自エイ隊 元役人 カンリ職 モト普通入らがフンキスる。

情容赦のない神の大殺戮 大雨作戦にイヤガ上にも踏みつけられて呻いたのは 苦しみ屈辱の免疫体を持たぬ石頭 マヨイの少ない従順なる正常頭 アンチ痴狂人だった

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

チミ達は生まれてこない方が良かつた  
と言われた危篤な氣の毒人 雨降り  
前は期待された人間像 生まれて生きるべき有益なユースフルマンカイ  
ンド達が  
ひっくり返された価値観 人間觀 正常人が狂人に支配されるクツジヨク  
がガマンならん  
あまりに非常識 秩序も規律も礼節もない 身勝手 利個人主義エゴイズム  
こんな猛獸人達に法律や倫理をうえつけ 身分の上下 善惡のキマリを教え  
かつての権力を力サニエバツ 生活に戻そうと決起した  
彼らにとつて どうして狂人至上主義  
だの無為徒食・融通無礙なダラク生活など認められようか  
互いに連絡し合い 情報集めあい 狂つてドーモーなヤツを一匹づつ潰してゆく作戦立て出した むろん最大の敵は朝太郎に夕太郎石頭連 石の精神を歌い出す

「 そうだ世の中には妙な者が多すぎる  
与えられた仕事や義務責任 思想をせず信じず忍耐できず  
歪み曲ったトンデもない考え方をひねり出す 国家国民軍隊企業その他

にとつて 学者や思想家神ガカリ狂人は最大病原菌だから俺達職權最大限に乱用し尽くして  
害虫頭をたたきわりキンタマ蹴り上げて 女にや警棒根元までブチ込んで  
暴力拷問威嚇三角 電気ショックに逆さずり それでも洗脳できぬ者は手足胴体バラバラにして痴呆共に見せしめる  
非国民党奴不穏分子に反体制派赤軍派など 一家一族みな虐殺 木一ム不真理狂ホームレスも悪の種をマカヌよう去勢する  
合法的にキヤツラやろめらをジエノサイド オレタチャヤそうした教育を受けた最精銳 キチガイ掃討作戦の始まりだ これに情をかける者は成敗する」

タンジュンに暴れたいだけのキチガイ人 組織も作戦何もなく ただ一時派に感化されるヤクザ者 不穏分子など 反体制派の痴呆切り崩し侵略が始まつた

石頭寺の官僚ゲリラの暗躍 反朝太郎派に引き入れて  
「 ワシも右翼のバリバリ猛者 協力するぞ 朝太郎麾下の④連中懷柔しきさせた幹部を内部から攻めて混乱させ分裂させて転覆計るのだ そのあとス

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

ターリン ベリヤに劣らぬ大蕭正  
赤刈り青刈り思想統一に 五人組や  
ラミツ告制度を復活し ヤクザ・

無政府主義者にブラク民 三人組

に白痴 無為の人 法の下に不潔分子はことごとく掃討

する よりよい明るい明日の社会

を築くため 我らに正義あり 我ら純日本民族の

血を守るため 他の民族 狂人共

を従える」

少數派の善たる國家主義者 皇國まで

持ち出して 船内の無規律生活を憂

い 革命起そうと力みに力む 朕才

モウニこうそ皇宗と

朝太郎・夕太郎の思想や悲願など 全

くもつて認められん許されん 惡徳

悪塊にしか思えない 考えられん

何が何んでも命に力エテも許せない今

の体勢 イマは反体制派にされてい

るけれど 必ず元の正しい世の中に

してみせると努力する ワタシに言わせれば 一方が強力にな

れば他方も強大になる力学みたいな

ものーしかも 自分らがかつて大量

の落ちこぼれを作ったことなど全く

理解もできず 今手前ラが落ちこぼ  
れの本頑児にあることも これまた  
理解できない石頭

平和的文化的マトモ社会建設のため廢

人は不要とばかり 神のものを神に

返したら アクマの害毒ばかりだか  
ら神のものを取り返そうとする連中

が 淋病軟性下疳に肺病ロク膜神経痛者は

疊つた美空にお葬式を挙げてしまえ

(注)と 偽狂人ニク腫ライ病ゾウ  
皮病ねむり症にナマケ病人などを一

掃しようと覚悟する 大根役者にくずれ者

カッパライ嘘つきオマケにチビリのジジイを抹殺せ

よ 船にバカはいらない 口もきけない

手話ちゃんも クソもイランそんな

ものは吐き捨てろ バカ共にムチを

くれて ガーレー船みたいにオール

でコガセレばよい

我々純正真人が天下をとつて やつら

を奴隸にし 死ぬほどコキ使つて少

しづつ消してゆけばよい 朝太郎の理想世界などくそくらえ 一

宿一飯の恩など この侮蔑の前にみ

な白紙撤回

元ケイサツ官 右翼 サイ判官に論語

読み 知的常識人も加ワッテ 石頭

革命ヤロラとスパイとダマシ作戦

にプロ 汚ない手テレン手クダは人

一倍 勢力範囲を広めてゆく

「わたしは固い石頭 狂人共がそう言  
うよ 世は規律と上官の命に従つ  
ておればよい

奇妙珍妙な思想にカブレルやは  
国の恥だゴミだ毒虫だ みな刑ム

所の終身刑

わたしは鼻穴デカイ元女看守 刑ム

所勤務 二十五年 国に奉仕だけ

の無趣味人間

わたしは常に絶対正しく 間違ひは  
ない 狂人痴人は非人間 四足家

畜 直立猿人

国家公ム員にオロカ者 盗人 変態

キヨーサンシユギ者はひとりもい  
ない

正しいわたしだからこそ 変な者を

シヨツピイテ 遠慮なく持ちもの

調べ 手紙やノート 友達の住所

まで無断で調査する ヤツラに人格人権発言權なんてアツ

テたまるか そんな権利を認める

から 世の中に悪人毒人断えぬの  
だ」

何とも恐しい醜女がいたものだ どう

してこんなものが船にマギレ込んだ  
のだ 労組も労改も共産國も行政司

法・國土さえなくなつた今日 未だ

あると信じて生きる石頭

馬券よりなお固い眞のクレージー 何

を言つても教えて頭に入る輩らじ

やない

だが團結力と思はケンゴ その代り  
ハバも広さも包容力もなく 狹いハ  
ンイでしかもの考え方られず 見るこ  
とすらできぬ者

元ヤクザ者も手下や子分を作り集め始

めている こんなことは始めから予  
想されていたことだ その者に人望

さえあれば組織は大きくなるし力が  
生れ出る

ところが裏切りや仲間割れ 不信不忠  
は序の口で ギリ人情恩義は人一倍  
に薄く汚ないヤクザ達 礼節義侠心

忍耐力にひどくトボシイ連中 それ  
だけに内部崩壊外部崩壊の下克上  
暴力支配の身勝手集團

「俺達を船底に閉じ込めて ネズミや  
エビカニふさまを食わしておいて

ヤツラは船橋に陣取つて ④部落の  
で 女を囲つて 船が沈めや鋼鉢

ヨットで逃げ出す腹だ  
ヤツラ武器も金も食料も持つて  
我らを人間扱いもせず何だと思つ

てるんだ 何のために連れ出した  
んだ

兄弟達よ 我ら渡世人無宿人の意地  
と度胸を示そうぜ 朝太郎一派を

あの手この手でつき崩し 我らが  
力で船を乗つとろう」

こんなことも起こりうる と考えてい  
たか ④のカンブ 武器になるような  
ものは一切置いていかつた 気違  
いに刃物 正常人も狂えばケダモノ  
ケダモノは刃物 刀物は何もない  
けど 狂つた正常人 正常人に成り  
得ない狂人には何をし 何をされる  
か分からぬ

片や朝太郎と共に長年暮した狂人至上  
主義者 世のゴミを食い チリを力  
ジリ 青カンヨギなくされた 世の  
批難差別モロに受け 世間のドロ沼  
から這い上がつた逞しい者共  
再びあのむごい 世間の代表者の迫害  
に苦しむ必要はない 虐げられるの  
は真平だと信じる連中が

(注)は、引用、書き替えたもので、必  
要があれば(著作権などの問題)、これを  
正式に届ける用意があります。

# 暑中街見舞申上

梅雨去だ明かるに連夜過ぎ又熱帶夜が續て

居ます。20過ぎ頃梅雨明半どく予報です。ホーリス貞立法案衆院委全党賛成で可決の由、必要措置を取る場合は人權に十分に配慮するに決議成り少國會過ぎせたことを念してゐます。1997年強制退去以来言葉や文字で云ひ難い事つぱりも努力は評議會のため一人の人間として心より感謝。有難うと申上げます。うつてこれがうれし他問題多く、ここで改めてお詫びを乞ふ。エコモモリとして法制化されたことは日本の民主主義の歴史に残る一人として胸あつくあります。

田代猛

平之家暁星



まちも連絡会活動ご苦労ます。いつも感謝してます。マンションの管理人として就私就弟しまして、4時用勤務で、自宅で30-40年勤めました。就弟と就弟を親愛者から常に喜んでます。辛抱あるうみりますか。平穏にて目標の健康回復②就私就弟思っています。通じて下さい。合掌

**あわせれば  
よわいまま生き  
日が暮れて  
安純園**

## 私の決意 岡本光司

真夏が来ると思い出す。

ちょうど四年前の事を。寝る所もなく、たべるものもほとんど入らず、もちろん職もなく、親子二人は新宿の街をさまよって歩いた。

そうしているうちに親の私は栄養失調から遂に倒れてしまった。その時、救いの手を差しのべて呉れたのが新宿連絡会だった。やがて、入院加療そして退院。次に待つて居たのは子供の眼病だ。これも連絡会のお陰で完治した。

翌年、親の私が又々入院した。

でも、完治した。

そこで、私達は自立をと決意した。

ドヤ生活（約三ヶ月）を経て、特人厚の西新井栄荘へ（約一年お世話になつた）。

一昨年（平成12年6月末）私達親子は都営住宅に入居した。現在生活保護を受給中ですが、息子が大した仕事ではないのですが、やります。私も必ず仕事をつきます。  
かつてお世話になつた恩を忘れずに、これからも頑張つてゆきたい。

ある人の言葉に「冬は必らず春となる」とあります。

ホームレス自立支援法も今国会で可決されました。だが戦いはまだまだです。

俺は、山谷から出で行く風のように  
何凧か遠くへ  
海が見える静かな所がいい愛せる  
人がいれば  
今の俺は、金のなく彼女もいな  
仕事もみく頭もく  
金持ちでいい男で腹もあれば  
いいけど現実が支配する社会  
風のようにな、いや夢のようにな

# もしもして、パートー

## ・基診・



## ・野醉 扱

5月7日、9時15分、両国にあるA社に着いた。あまり奇麗でないビルの二階にそれはあった。ドアを開けて中を見ると、物が散乱していた。中に入つて恐る恐る声を掛けてみた。「おはようございます。面接に来た者なんですか?」

荷物に隠れて見えなかつたが、立ち上つて顔だけのぞいて、年

6月16日、日曜日、朝5時30分、目が醒めた。すぐにテレビをONにしてチャンネルにした。朝の将棋対局、6時から早碁選手権戦を見た。5時30分に目が醒めるのは、この将棋と囲碁を見るためだけなのに、もう何十年も続いている。飲んでいたころも夜中の2時3時に帰宅したとしても必ず見ていた。自分自身を通してみてもわかるのだが、人は習慣性の強い動物なんだなあ……と思う。

今日は、「第11回南多摩地区ステップの集い」のある日。

場所——東京都府中市片町2-17 片町文化センター2階

時間——9時30分～15時30分、開催される。

アルコホーリクスアノニマスは経験と力と希望を分かち合い、私たちのアルコール依存という問題に取り組み、新しい（酒を）飲まない生き方を求めている仲間たちによるグループです。

その中で、提案としてまとめあげられているログラムに「12のステップ」があり、この「12のステップ」に基づいて、下記のとおり仲間の集いを開催させていただくことになりました。  
同じ問題に取り組んでいる多くの仲間をはじめ、医療、福祉、行政、報道関係の方、学生、あるいは家族の方など身近にアルコールの問題をお持ちの方々など、多くの参加をお待ちしております。……とパンフレットにある。  
ロダンはこの集いの最後のステップ12のスピーカーに決つて、いた。

すぐに思い直して、「わかりました。今日はどうもありがとうございます」として席を立ちA社を出た。A社を出て思わずほつとした。A社に入つておそろつてきた、不安いらだたしから開放されたからだろう。思わず、よかつたあ……と思った。  
丁度9時30分だった。両国駅まで行き、大江戸線に乗り、新宿西口駅で降りて、エルタワー23階にある新宿ハローワークに来ていた。さっそく、ワープロを借りて求人を探していると、S社があつた。

などとあつて、住所が三鷹駅、歩いて2分のところだと、ともに、かくにも、面接に行こうと思つた。

求人票を打ち出して、印刷をした。それを持って、紹介状の交付を受けるため窓口へ行き番号を取る。待ち人数は0だ。

勤務時間——8時～17時  
給与——×××円  
交通費——全額支給  
休日——完全週休二日制  
採否決定——面接後一週間

ほどなく「11番窓口へお越し下さい。」とのアナウンスがあった。面接は本日14時に決った。これは忙しい。紹介状の交付を受け、すぐにアパートに戻り履歴書等必要書類を確認して、改めて身支度をした。

三鷹までは新大久保からだと、山の手線に乗り、新宿で中央線に乗り替える。百人町のアパートを出て、25分もあれば三鷹駅に着く。

三鷹はなつかしい思い出がある。長女が生れたのが昭和46年5月2日だから、その前年の45年10月ごろに、関西の西明石から引越してきた。三鷹中央病院のすぐ裏手にあるアパートに移り住んだ。自殺した長男のマー君が1才半位だった。それはあわただしい引越しだった。

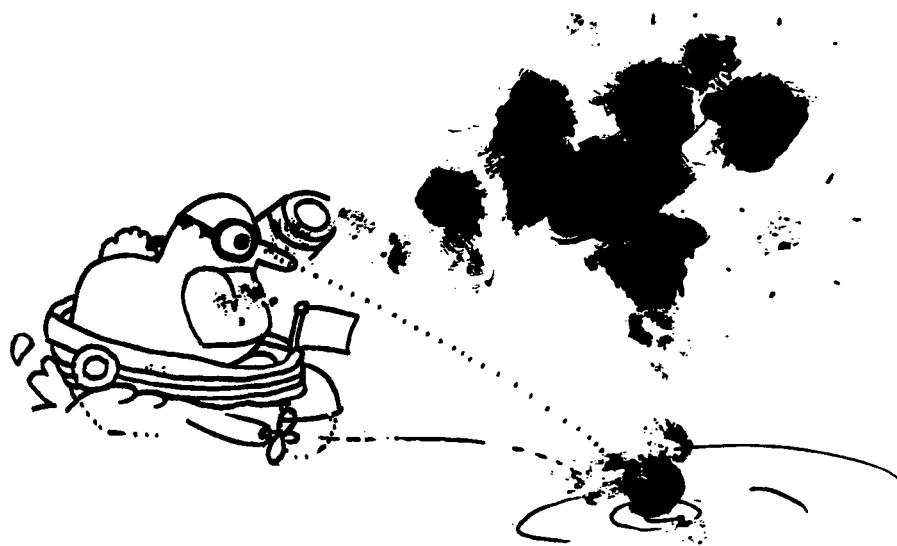
その時の妻の兄が会社を経営していたのでそこで働く約束だった。

義兄の社長はボーリングに狂っていた。武藏境にエイトボールというボーリング場があつて、仕事前の6時から8時までの2時間、毎日のように通つた。早朝割り引きというのがあつて、料金は半額だった。

三ヶ月もすると仕事に行かなくなつた。

いつも酔つていた。昼間は三鷹駅前にあるパーラーニューヨークでパチンコをして、夕方になると、駅北口の墓会所「橋本道場」に通つた。その墓会所で一番強かつたのがNさん。当時5段位で打つていたロダンが3子の手合だった。不思議な強さをNさんに感じていた。いつも一升瓶を置いて飲みながら打つていた。夜中の1時ころまで打つて、それから近くの一杯飲み屋に通つた。奥村チヨのヒット曲で終着駅という歌があつた。落ち葉の舞い散る停車場で：か。ここでよく歌を歌つていた。まだハチトラの時代だつた。レーザーデスクを置いてある店はなかつた。

平成12年6月29日、20数年振りに三鷹に来た。もうすっかり当時の面影はないが、南口を出てほどなく行くと交差点があつて、そのショッピングセンターの三階に墓の看板が見える。その墓会所が今現在、Nさんの経営による墓会所「三鷹道場」だ。横浜



に住んでいたころ、二、三度遊びに来ていた。昭和54—5年ごろ  
だつたと思う。この時は、土曜日に来て、当然のよう酒を飲み  
ながら朝まで碁を打ち続けた。「強くなつたなあ、県大会に出てる  
の。」といわれたが、実際は、横浜地区大会等（県大会に出場する  
ための予選）ではほとんど勝ち抜いていた。

三鷹に来るのは、その時以来となる。

平成12年4月25日、京王線八幡山駅にある都立松沢病院に入院  
した。松沢病院には9月11日までいた。当初3ヶ月入院といわれ  
ていたが、4ヶ月半も入院していったのは施設待ちだったからだ。  
入院中は「行動」目的という規則があつて碁を打つことはなかっ  
た。一度担当の医師に話したことある。「先生、碁会所に行かせ  
て下さい。」と頼んだら、間ばつ入れずに、「ロダンが入院してい  
るのは碁を打つためではないのです。お酒を止めるためなのです。  
と一蹴されてしまつたなあ。」

S社の入口左にブザーがあつて、押すと年配の女性が出てきた。  
S社の入口左にブザーがあつて、押すと年配の女性が出てきた。

「どうも、こんにちは、どうぞお入り下さい。」  
「失礼します。」といつて、すすめられた椅子に座つた。

面接官が、ロダンの座つている前に座つた。  
さほど広くない事務所は奇麗に片付いていた。

ひととおりの儀式がとどこおりなく進んで、胸のうちに採用さ  
れるとといなあと思つていたら：

「明日から来ていただけますか。とりあえず住民票を持つて來  
て下さい。」といわれた。

そして、「明日、会社指定の病院で健康診断を受けて下さい。

アルコール依存症者、薬物や毒物中毒者は採用できません。あと本  
籍地に行つて身分証明書を取つて来て下さい。明日は11時30分ま  
で出て来て下さい。」といわれた。  
あれ、あれ、あれ、どうなつてゐるの：採用してくれるんだなあ  
と思つた。しかし、すぐに不安になつてきました。

ロダンは間違いなくアルコール依存症者だ。今現在、2年間、

酒が止つていて。酒さえ飲まなければ別にどうということはない。  
A A M—I T E I N G に通い続けることさえできれば、酒を飲むこと  
はない。一杯の酒さえ飲まなければいいのだ。酒さえ飲まなけれ  
ば健常者と変ることはないので。そう言い聞かせているうちに不  
安は少しずつなくなつてきた。

そして

「では、明日、11時30分に出社します。」

「よろしくお願ひします。」と返答していた。

まず、その足で、住民票を清瀬から百人町へ移すこととした。  
新宿大久保出張所で、全てが終了したのが17時だった。あとは、  
明日横浜に行つて、身分証明書の交付を受けねばいい。

5月8日、横浜市営地下鉄、港南中央駅にある港南区総合庁舎  
に再び訪れるなんて思いもよらなかつた。仕事をすることがで  
きる、希望が涌いてきたのだ。

11時30分、三鷹の会社に着いた。

「M病院で診察を受けてきて下さい。」といわれ、すぐに病院へ  
行つた。待つことなく診察が始まった。15分程して診断書を渡さ  
れた。

そして、それには

「異常なし」と書かれていた。

ロダンはアルコール依存症者だ。アルコール依存症に完治はな  
い。飲めば再びどうにもならなくなつて連續飲酒になることは明  
らかだ。死ぬまでアルコール依存症なのだ。ロダンの担当の主治  
医が、「ロダン、死ぬまでお酒を飲んではいけません。」と断言し  
たのだから。

ロダンはいつた。ロダンの作品のなかに未完成の作品があつて、  
それは「行動の人」なんです。アルコール依存症者が酒を止め続  
けるにはA A M—I T E I N G に通い続けるしかないのです。「行動の  
人」が完成した時は、ロダンが死ぬ時なのです。したがつて、生  
き続けるためには「行動の人」が未完成でなければ駄目なのです。

JRを出しのカド ラルルルル持て  
今も勢いよく  
燃え上った  
アサチカ  
訪ねて来た  
この若の娘たちが  
訪ねてくから  
盛況  
大勢きょうに会つた

102.7.17

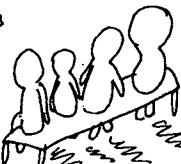
ひせ"廻るか?

廻るだけでは"生きていけそらもく..  
山谷に生きて、どうして俺か社会か  
追い出されたこの山谷寄せ場に來たのか  
負け犬になつて、能力も体力も弱々この俺.  
か行き付いた所、時を越え~~は~~ひりか。  
(化け物)になつて獣として生きていく。俺だけの  
世界

# 水道町より

新潟県新潟市水道町。先日トイレが故障して修理屋さんを呼んだ。  
水道町「ほいなす」とたべた訳もなく納得していた。

東の恒例行事、教会学校のひともたちとキャンプに行ってきた。二泊三日・総勢40名・大騒ぎ。



雨(モモリ)を利用して  
流(フロウ)し、「おほど集中力のいる食事は  
ない。もう必死。時々(ハサウ)で印も流れ  
熱(ヒート)が繰り広げ  
らかる。」



森の探険、ハンモック、テント  
石(イシ)がまどで火(ヒ)焼(ヤク)いて  
そつあく煮(アツクニ)して  
サカ、野球、  
肝(カハ)だめし、夜(ヨメ)散歩(サンボ)  
はホタル付き。  
宿(ヤマ)は子供(こども)の  
タバタ走(タバタシタ)り回(ハラタケ)  
と笑(ハラハラ)いきだらけ  
じいからエネルギー  
が湧(ヒヤウ)るかとあきやまくら  
遊(アソブ)がなきなし。

「やあから(ヤアカラ)」  
「やあから(ヤアカラ)」  
「やあから(ヤアカラ)」  
「やあから(ヤアカラ)」

和(ハグ)言(ハガシ)ふよ。

「ふと寝(ハシマリ)て起(ハシマリ)て座(ハシマリ)てお茶(ハシマリ)てやうやくなんて  
大人(ハシマリ)とわからぬ(ハシマリ)になあ」と考(ハシマリ)えたのも和(ハグ)だよすばくはした  
ハハハ、今(ハハハ)はお茶(ハシマリ)てやうやくかだり。

高橋 美香

# 路上 ふらり 散歩

## 東京

第20巻

「責めたてられる夏」

写真・岡田知子  
文・笠井和明

きっと何者かに背中を押されているのであろう。転げ落ちているのか、昇っているのかは定かではないが、何かと一点に留まつている事が出来ない質になってしまった。一難去つてまた一難。活動用語で言うところの課題というものが、足を動かせば動かすだけ山積みになつていく。

鎮魂の旅路は終りなき旅路であるようだ。

それでも寝つかれない。盆に死者が戻ってくるとするならば、どれだけの死者が枕元に立つていようか。黄泉の国は過密状態。戻つて来ずとも良いのにと思う事もあるが、何やらの未練があるのであろうから、無下には断れない。ヒートアイランドの東京ではこれだけの死者が戻つて来ても涼しくならず、逆にうなされ汗が吹き出るだけ。

死者に法は適用されない。無念は誰かが背負っていくしかない。それが尚更、辛い。十年という未来は手にしたもの、十年という



過去は誰が振り返ろう。「よく頑張ったね」という言葉は死者に何の慰めになろうか。

死者に責められながら生きたくもないものであるが、けれども生きていかねばならぬ地獄は一体いつまで続くことやら。死んだ者の証が次から次へと忘れ去られてしまうこの世に、生きる証などどこにあるのか？

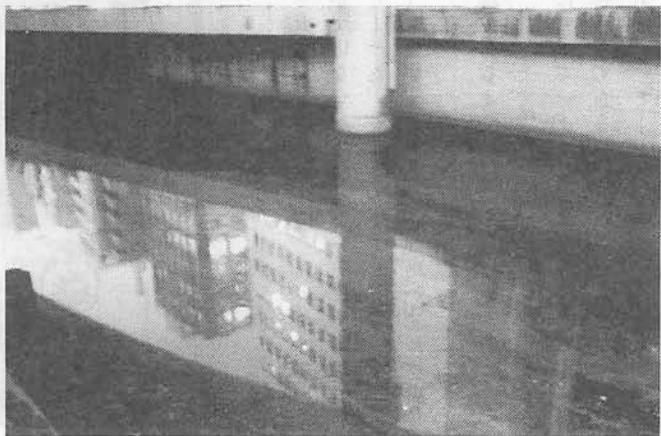
悪い、悪い、悪い、責立てられながら人は生きねばならぬのか。

近頃つとに東京の街に幻滅を感じている。東京の街は誰に背を押されているのか、たつた数年のうちに景観を破壊し、人々の記憶を不確かにする。知らぬ間に変化し、清し顔で居続ける街。そこに独特の美観や利便さはあるのかも知れないが、それがとりたててなくとも構わない、余計な美観や利便さ。そんな東京の鼻持ちなさが、特に近年目に付き始めたからだ。バブル崩壊後、少しほは反省したかのように思える開発ラッシュも地価が下がると共にここに来てそれが当たり前かのように再び再開。そしてその主の巨大さ故に庶民は手も足も出ない。



夕刻、JR飯田橋駅で降りる。駅がかつての東京を想起させる唯一の遺産か、東口の古ぼけた雰囲気だけは変わらない。高速の下には東京湾に流れる神田川。

後楽二丁目に足を踏み入れ、開発から免れた街々を散策。夏の氣だるい熱気が街々にこもる。納涼感というものはどこにもない。アスファルトが悪い訳ではなく、利便さと欲望に狩られ、揚句の果てを見渡せない偏狭な想像力が悪いのである。無論、人にそんな事を求めるのは酷な事かも知





れぬ。最先端に荒らされるのは東京の宿命であり、おそらくこれからも誰も抗えない。

これからビルが建つのであろう広い空き地には猫が地面に身体を冷やす。その向こうの国道からは車がまき散らす砂ぼこりの煙幕。偶然残ってしまったビルの谷間の下町風情の商店街も暑さでうだり、悲鳴をあげている。東京の夏は蝉も普通に鳴かない。

夏は何もかも生々しく、そして人のまともな思考を停止させる。所詮季節に抗えず、振り回され、うなされるだけの夏。街を歩いても共感するものではなく、流れ出す汗の前に、思考は爛れた内へ内へと向う。ぼやけた頭は善悪の、苦楽の、しまいには生死の区別もつかず、相手の解らぬ誰かと戯れる。

が、妖艶な水の記憶は高速道路に閉じられ、代わりにアスファルトからの反射熱が蜃気楼と雷雲を作る。

北野神社では何かの祭りか、ぼんぼりの灯が丸く光る。人工的な巨大な螢の群れのよう。階段を昇っても、祭事はまだのようで、ぼんぼりだけが都会の夜を薄暗く照らす。境内には誰一人といない。住民も勤め人もクーラーのついた部屋から一步も表には出たくないようである。階段を一気に登ったせいか、シャツの袖もに汗が回り込んでいた。

春日通りをひたすら北へ。この大通りも人影はまばら。車が轟音をたてながら追い越して行く。ヘッドライトも煌々とせず、よどんだ空氣をぼんやりと照らすだけ。空気が重く、窒息死した人の気持が何となく解る。若荷谷駅まで歩く。途中目を見張るものはなにもなし。のっぺりとしたビルと車のみ。

けれど、また秋が忍びより、背中を押す。今年はもうこれだけしかない、急げ、急げと。何を急げと言われているのかも解らずに、とにかく急ぐ。そんなこんなで、日が暮れ、年が暮れ、人生も暮れる。

あ、海が見たいな……

# 赤い花

はり師いが丸

「はり師いが丸の肝心かなめ」改題

いが丸は冬生まれ。しかも雪深い土地の育ちである。この気質は、深い根雪が溶けきるのを黙して待ちながら齡を重ねてきたことに少なからず起因する。北国の人たちの刻む皺や表情の厳しさの理由を推し量ることはできても、夏の遣り過ごし方については、この歳になんでもつかめていない。南国の人の陽気さには、ただただ惚けてしまう。開放的な土壤が人の表情をやわらかくするのだろう。せめて海が近ければまだ違ったかもしれないが、周りが山だったのがまたいけない。海は何んでいるだけでも許されるが、山は登らねばならない。寂然でなくてよい場所。構えなくてよい空間。

鬱屈していた連れを「海に行かない?」と誘ってみると、「海でカレーを食べるなら行ってもいい」とぬかす。ジャワカレーかなんかのCMの影響らしかった。白い砂浜は期待するなよ、と念を押しつつ、海の近くに住む女友達に電話をすると、快くカレーを作ってくれた。炊飯器と鍋を持って浜辺へ向かった。

波打ち際は境目。ヒトはこっち側にしか生息していないのだな。「陸の上は、なんでこんなにせわしないんだろう」いが丸がつぶやくと、「コンビニとか、こっち側にはそんなものばっかりあるのが不思議だよね」と海と陸地を見渡しながら女友達が笑った。

水平線の向こうにまたしても陸があり、ヒトがうごめいていることは想像しないようしよう。たかが人。ちっぽけなものだと、圧倒してくれる風景は心地よい。主義とか理屈とか、頭でっかちなものをこっぱみじんにしてくれる。波はよい。洗われて、洗われて、夾雑物を削りとり、無為なものだけを残していくてくれるようだ。

山に生きる人々は厳しくふくよかだ。海に生きる人々はおおらかさの中に激しさをひそませている。都市に生きる人々は、海にも帰れず、山にも帰れず、人を求めて喘ぐだけなのか。人なんて、最も不確かなものだというのに。「人によって傷つけられるのに、なんでそれでも、人を求めるのだろうな」女友達は静かに笑んでいただけだったが、「ぬくもりを求めるのは、人の胎から生まれて、赤子のときに抱かれた肌の感触を覚えているからだろう」という意見では、完全に一致した。乾杯しようと思ったが、肌寒かったので、カレーを食べることにした。

曇り空の下、砂だんごをつくった。貝殻を拾った。駆け回ってはしゃいだ。カレーがうまかった。連れの提案に感謝した。

あわただしい生息地に戻ってくると、夏の花が咲き出していた。「さるすべりって、ピンクだったっけ?」東京生まれの連れが笑顔を向けた。



# おきなわ旅日記

## ～釣り～

恩田美代子

与那国島の観光地を巡っていると、役場の観光課のイクコさんが物書きの先生とやらを案内しているのに遭遇し、民宿に泊まっている私に、「うちならタダだから明日からおいで」と言ってくれる。それはありがたいと、早速移動。その日から6人家族の居候となる。

この家のおばあちゃんは釣りが趣味と聞き、すかさず「海釣りやってみたー！」と叫ぶと、早速翌日連れて行ってくれる。切り立った岩壁の上から、真下の青い海に糸を垂れるのは夢のよう。なんとも豪快で、魚が豊富なせいかあっという間に群れが餌に食らいつく。だが、糸を引くのが難しい。私がまごついている間に、おばあちゃんは次々魚を釣り上げる。釣ることだけに神経を集中させるのは気持良い。

結果は、私一匹。おばあちゃんいっぱい。家の裏庭でおばあちゃんが魚をさばいているのを見ていると、自分の血が騒ぐのを感じる。他の命を犠牲にして、自分の命に繋げる。それが当たり前に思える。あたしゃ、ベジタリアンにはなれませぬ。魚の天ぷらを堪能し、おばあちゃんと昼寝。極楽、極楽。

次号21号は11月1日発行予定です。

原稿締めきりは10月4日必着にて

お願いします。

### 編集後記

「カラカラと 乾いた夏を ひたむきに

歩き続けて せつなき日暮れ。。。」

照りつく日射しに負けじと、日中ちゃきちゃき動きまわって迎える夏の夕暮れ。遊び疲れた、夏休みの子供のような自分。なんだか懐かしく、せつない気持ちと共に、一日一日が過ぎていきます。がしかし、秋がきたらいっそうせつないんだよー。いつの日もひたむきに生きたいものです。露宿とともに4歳も年とっちゃいました。みなさま、素敵な秋を！（お）

### 露宿ペン俱楽部短信

今年の夏は暑かったですね。まだまだ残暑が続くと思いますので健康には十分留意したいものです。

新宿などの夏まつりも無事に終り、じきに文化の秋がやってきます。いつの間に「露宿」も20号に達し、4年目の秋となります。仲間からの投稿とつながりだけを頼りに細々と発刊し続けて来ました。気負わず、見栄はらず、ぼちぼちぼちぼち、これからもやっていきたいものです。生きている証を「露宿」に刻み、自らを、そして仲間を励まし続けましょう。

# Rojuku

購読費・スポンサー費  
送り先  
郵便振替口座  
00160-6-190947  
「ろじゅく編集室」

## 露宿バックナンバー 有ります。

露宿バックナンバーは創刊号から（2号、4号は売切れです）在庫があります。お求めはろじゅく編集室まで、郵便振替用紙、FAX、TEL、メールなどでご注文下さい。

# 「ろじゅく」

## 定期購読大募集

### [露宿定期購読の御案内]

毎号確実に読者のお手元に届けるため当方では定期購読を承っております。  
定期購読8回分 5000円（郵送費込み）  
定期購読4回分 2500円（郵送費込み）  
一回ごとの購入でも大歓迎。  
一冊は送料込みで660円となります。

### 申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

露宿 ROJUKUはココで買えます。

◆模索舎 東京都新宿区2-4-9 TEL/FAX 03-3352-3557 ◆TACO ché 東京都中野区中野5-5-2-15中野プロードウェイ3階 TEL 03-5343-3010 FAX 03-5343-4010 ◆スペースかぼす 東京都新宿区大京町3新大京マンション304号 TEL 03-5367-5666 ◆新宿中央公園ポケットパーク（毎日曜午後6時から8時まで）TEL090-3818-3450 ◆石手寺 愛媛県松山市石手2-9-21 TEL 089-977-0870 ◆ぐりん・びいす 宮城県仙台市青葉区立町18-12-104 TEL/FAX 022-213-6739

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU）」第20号 2002年9月1日発行（隔月刊）

主宰・笠井和明 編集／発行・ろじゅく編集室 〒170-0014 東京都豊島区池袋1-14-5-13  
TEL／FAX 03-3981-6746／090-3818-3450（笠井）  
Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・<http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/>  
郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」  
販売協力・新宿連絡会、露宿ペン俱楽部 印刷・株式会社ラジオグラフィー